日流と韓流

石崎菜生

筆者は一九九五年から九七年まで海外派遣員としてソウル大学の大学院に留学していた。学生たちとの付き合いの中で驚いたのは、彼らが日本の大衆文化についてよく知っていることであった。日本の漫画やアニメが好きであり、「キャンディ・キャンディ」や「未来少年コナン」などの話をしていた。サッカー選手の安貞桓のニックネームは「テリュース」であった。

韓国は建国後、長い間日本の大衆文化に対して門戸を閉ざしていた。しかし実際には、韓国製に見せかけるなどして、日本の大衆文化を取り入れていたのである。それが日本製であることは、韓国人もよく知っていた。故朴正熙大統領自身、私的な場では日本の歌を歌うことがよくあった。経済発展の過程で、先進国へのキャッチアップのために日本をモデルとすることが多かった韓国からは、多数の留学生やビジネスマン、政治家が日本に来ていた。大衆文化だけに門戸を閉ざすことはもともと無理であったのかもしれない。

公式的には一九九八年一〇月、金大中政権が第一次開放を行って以来、段階的に日本の文化が開放された。最初は映画やビデオの一部、出版（日本語の漫画、漫画雑誌など）が解禁された。現在、映画はすべて、日本語を含むすべてのレコード、CD、テープ、ゲームソフトも開放されている。

その後、「冷静と情熱の間」などの映画が人気を集め、「世界の中心で愛を叫ぶ」は人気女優のソン・ヘギョ主演で韓国版にリメークされた。その中で、「日流」をリードしているのは出版物である。村上春樹や宮部みゆきなどの作品が翻訳・出版され、ベストセラーになることも少なくない。塩野七生の『ローマ人の物語』も人気を博している。

日本では、韓国のドラマや映画は人気を集めても、小説は大衆的な人気がない。ごく一部の韓国に関心を持つ層にしか売れないのである。韓国の小説を読んでみても、政治性が強かったり、芸術性を追求しすぎていたりして、エンターテインメントとしての面白みに欠けるのである。その穴を「日流」の小説が埋めている格好である。

しかし、日本文化開放当初に危惧されたほど、「日流」は韓国を席巻しはしなかった。韓国のコンテンツ産業がすでに発達していたからである。今や時代劇も含め、日本のお茶の間で韓国のドラマを見るのは当たり前の光景になっている。私の行きつけの美容院の美容師さんも「チャングムの誓い」の大ファンであった。韓国人にも日本の韓流ブームはよく知られており、アジ研の客員研究員の方から「私の頭の中の消しゴム」、「マラソン」など四枚組のDVDの入ったセットをおみやげにもらったこともある。

韓流が育った背景の一つとして、韓国人が芸術好きであるという土壌があげられよう。韓国人は詩を好むため、ドラマのセリフが多少キザではあるが、深みがあるのである。また、アジア経済危機に直面した金大中政権が、輸出振興のため俳優養成学校に補助金を出すなど、コンテンツ産業の育成に力を入れたことも大きい。

韓流は中国や台湾、東南アジア、中東、東欧などでもブームを巻き起こした。発展途上国の人々が韓流を好む理由は、家族関係の親密さに親近感を抱く一方、先進国並みの豊かな消費文化に対する憧れがあるためである。

日本人はある種の郷愁をもって韓流を受け入れているようである。韓流が描く家族の姿は、日本では既に過去のものとなった。ストーリー展開は一昔前の日本のドラマを見るような安心感がある。韓流と「日流」は相互に交錯し合っているのかもしれない。

（いしざき　なお／アジア経済研究所地域研究センター）